



Title	フランスのアール・ヌーヴォー建築に見るアーツ&クラフツの影響
Author(s)	廣瀬, 緑
Citation	デザイン理論. 2019, 73, p. 86-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71198
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランスのアール・ヌーヴォー建築に見るアーツ&クラフツの影響

廣瀬 緑 パリ・ディドロ大学, 東洋文学部 LCAO

はじめに

フランスの美術雑誌『アール・エ・デコラシオン』*Art et décoration*の中でアーツ&クラフツについて主に執筆、紹介したのは、アール・ヌーヴォーのデザイナー、モーリス・ピラー・ヴェルヌイユである。彼はウジェーヌ・グラッセ (E. Grasset) の弟子として、デザイン理論と方法に関する書物を単行本で23冊出版、論文を118件も発表し、アール・ヌーヴォーの普及に努めた人である。本発表では雑誌*Art et décoration*の中でどのようなアーツ&クラフツの建築がフランスで紹介され、何が評価されたのか、そしてヴェルヌイユが自ら設計した館とパリの女子電話交換手寮の建物を紹介しながら、快適な室内と建築を求める動きが現れ始めていた当時のフランスのアール・ヌーヴォーについて考察してみたいと思う。

1. アーツ&クラフツのフランスへの伝播

1890年代に入ってフランスでもアーツ&クラフツは文学者や芸術家によって次第に紹介される。その思想と実際の作品はフランス、特にパリに伝わった。伝播の方法はいくつかあったが、以下のようにまとめられる。

1) メディアによる紹介雑誌*Art et décoration*, *Art décoratif*, *The Studio*などの工芸雑誌によるアーツ&クラフツ作品の紹介

2) ビング (S. Bing) の店を通じた家具などの展示、販売

3) フランスにおけるアーツ&クラフツの展覧会開催

4) 芸術家同士の交流

これらを通じて情報が行き渡っただけではなく、*Art et décoration*を通じて積極的にアーツ&クラフツから見習う点を紹介し、取り入れようとした動きが見られるが、そのイニシアティブを取ったのがヴェルヌイユであった。フランスの工芸界ではジャポニスムの流行の後、「工芸美術」と「工業美術」の違いを巡って質の良い、しかも高価ではない工芸作品を作ることについて作り手自らが盛んにこの問題について疑問を持つようになっていた。工芸作品、特に室内装飾を購入しても、それを納める家はどうかという現実的問題も次第に表面化していた。これを打開する策の一つとしてアーツ&クラフツが目されたのであった。

2. ヴェルヌイユ設計の館

ヴェルヌイユは*Art et décoration*の中で様々なアーツ&クラフツの建築を紹介してきたが、自らの家もそれを手本に建築するに至った。現在、個人の住宅として使われているこの館はヴェルヌイユが1910-1914年の間住んでいたフランスでは珍しいコテージ風アーツ&クラフツの住宅である。外観の模倣だけではなく、素材もその土地の物を使う、材料費を押さえ低価格にこだわる、彫刻などの装飾を一切省く、各部屋の間取りを昔風のブルジョワ向きの間取りにしないなど、それまでのフランス郊外の建築には見られない要素をもったものを完成させた。

3. ブリオー (E. Bliaut) による女子電話交換手の寮

この寮はヴェルヌイユが紹介してきたアーツ&クラフツの別の応用例として取り上げることができる。ヴェルヌイユがやはり鳴り物入りで *Art et décoration* の中でこの寮を絶賛したのは理由がある。それは、この寮がアール・ヌーヴォーのエレガンスを保ちながらも低価格で実現し、それも地方から出稼ぎに来た若い女子労働者のために作られたという点である。この建築を請け負った建築家 Bliaut 自身も述べているようにイギリスのアーツ&クラフツを参照したからこそできた産物であった。フランスでも1850年頃から公共住宅建設の意識が高まりつつあったが、大都市パリに作られた近代建築は依然ブルジョワ向きであった。召使いとは入り口も同じではない設計、入るとすぐ大広間になっており、弁護士や医師などが住むのに使いやすい間取り設計になっていることは当時の建築家ヴィオレ・ル・デュク (Viollet-le-Duc) が何度もその著書や論文の中で批判していた。

おわりに

フランスでは、1890年代から雑誌でアーツ&クラフツが大きく取り上げられ、工芸家の間に色々な刺激を与えることになった。*The Studio* を参考に *Art et décoration* や *Art décoratif* といった工芸美術の雑誌がフランスでも相次いで創刊され、Bing の店では実際にアーツ&クラフツの家具や工芸品が販売されるようになった。その伝播は「ラール・ドン・トゥー」L'Art dans tout のような建築家と工芸家のグループを生み出し、彼らの最大の目的は快適な住まいをつくることに置かれた。グループに所属していない建築家や工芸家の間でも「住みよさ」「快適な空間」が重要視されるようになり、社会問題として

労働者の住まいを語るときにイギリスの建築は必ずと言っていいほど参考にされた。様式としてはヴェルヌイユの館のように全くアーツ&クラフツのものと、外観からはその影響が見えないものの、合理性を追求する結果、簡素ですっきりしたアール・ヌーヴォースタイルの建築の二つに分けられる。後者はその後、外観もアール・デコへと変化していくものと考えられるが、こうした住宅の問題を抱え込んだ一連の動きとアーツ&クラフツの刺激、そしてアール・ヌーヴォーを土台にしながらアール・デコへと転換していくプロセスは決して無関係ではないと思われる。